

# 勝林寺寺報

大應供（阿弥陀さまの別の呼び名。なにものも喜んで受け入れてくださる如来さま）  
帰命せよ（お任せしましょう）

「お正信偈」のあとに唱える「和讃の五・六首」です。

清淨（じきょう）光明ならびな  
遇斯光（ぐしこう）のゆえな  
れば

一切の業繫（じゅけい）もの  
ぞこりぬ  
畢竟依（ひきょうえ）を帰命  
せよ

（難語解説）

清淨（スミキヨシ、きよらかな、無らない、穢れない、煩惱の罪を消すひかり）

遇斯光（この光りに遇うものはみな）  
業繫（人間の行為（煩惱）による束縛）

畢竟依（最後の依りどころ）

仏光照曜（ぶつこうしょうよう）  
最第一

光炎王（こうえんのう）仏とな  
づけたり

三塗（さんず）の黒闇（くろあん）  
ひらくなり  
大應供（ダイオウグ）を帰命  
せよ

（難語解説）

最第一（阿弥陀仏の光明は最も広く強い）

光炎王（阿弥陀如来の呼び名の一つ。すべての穢れ濁りを焼き尽くす光のほとけさま）  
三塗（塗は道のこと。地獄・餓鬼・畜生の三悪道のこと。人間わたしのあさましい生きさま）黒闇（明るい希望の光りもないわたしの人生）

葬儀

一月二十日

榎見 横山 守様 五十七歳



出石 川原 湯口 雄基さん（修二様方）	出石 蔵持 平野慎之助さん（美和子様方）	但東 市場 大石 達也さん（英明様方）	但東 出合 関川 慎也さん（永様方）	平成二十六年度 勝林寺主な行事計画
一月一日 修正会	一月一八日 代議員会	二月一日 佛壯総会	二月一日 佛婦評議員会	一月一八日 代議員会
二月一日 総代会	二月一日 佛壯総会	二月一日 佛婦評議員会	二月一日 佛婦評議員会	二月一日 佛婦評議員会
三月二一日 春彼岸会・佛婦総会	三月二一日 合同役員会	三月二一日 春彼岸会・佛婦総会	三月二一日 合同役員会	三月二一日 合同役員会
四月一二日 觀桜会（グランドゴルフ大会）	五月五日 花まつり	五月一七日 降誕会	五月一七日 降誕会	五月一七日 降誕会
五月二六・二七日 出石組念仏奉仕団	六月二二・二三日 納骨研修旅行	六月二二・二三日 納骨研修旅行	六月二二・二三日 納骨研修旅行	六月二二・二三日 納骨研修旅行
六月二八日 おみがき奉仕	七月八・九日 永代経	七月八・九日 永代経	七月八・九日 永代経	七月八・九日 永代経
八月八日 戰没者追悼法要	八月一九日 仏婦・子ども研修会	八月一九日 仏婦・子ども研修会	八月一九日 仏婦・子ども研修会	八月一九日 仏婦・子ども研修会
九月二三日 秋彼岸会・合同役員会	九月二三日 秋彼岸会・合同役員会	九月二三日 秋彼岸会・合同役員会	九月二三日 秋彼岸会・合同役員会	九月二三日 秋彼岸会・合同役員会
一〇月二五日 敬老報恩講	一一月一五日 おみがき奉仕	一一月二二・二二日 報恩講	一二月二七日 餅つき	一二月二七日 餅つき
一一月二二・二二日 報恩講	一二月二七日 餅つき	一二月二七日 餅つき	一二月二七日 餅つき	一二月二七日 餅つき
一二月三一日 除夜会	一二月三一日 除夜会	一二月三一日 除夜会	一二月三一日 除夜会	一二月三一日 除夜会

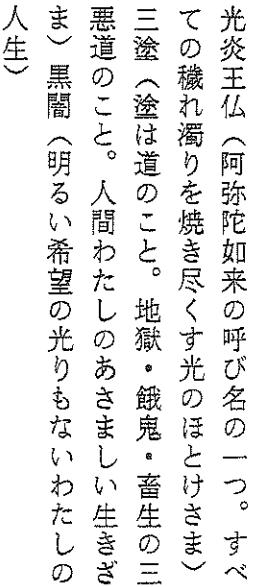
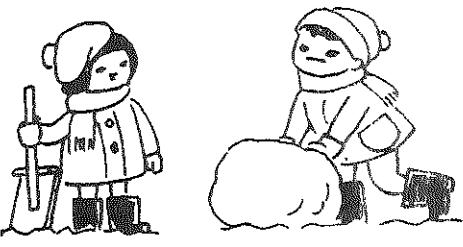


方々に「歎異抄」と念珠に住職の言葉を添えて、送らせていただきました。おめでとうございます。

## 二月 勝林寺 予定

一日（土）	勝林寺仏壯 総会
二日（日）	仲田宅 一周忌
三日（月）	川崎宅 二七日
五日（水）	兵庫教区 出石組巡回
七日（金）	宮嶋重喜宅 忌明法要
八日（土）	水鶴伊佐夫宅 忌明法要
九日（日）	角折幸江宅 一周忌
一〇日（月）	金久英明宅 三回忌
一一日（火）	勝林寺仏婦 評議員会
一二日（水）	安田宅 忌法要
一三四日（土）	川崎宅 忌明法要
一五六日（日）	龜井博文宅 三回忌
一七八日（月）	松井宅 一周忌
一九九日（火）	兵庫教区仏教青年の集い
二〇〇日（水）	みのりを聞く会

（敬称略）



讃岐（香川県）の庄松さん

なんともない  
なんともない  
なんともない  
なんともない

七  
人  
間  
事  
記

法語カレンダー  
ひご  
はう  
月  
人  
は  
法  
を  
求  
め  
る  
に  
止  
ま  
つ  
て

どうも

「門徒のある方から「ししゆ  
ず」という珍しいものをいただき  
ました。その名の通り「ゆず」  
なのですが、その大きさたる  
や半端ないのです。夏ご大人

庄松さんは早くから——妙好人（みょうじん）とよばれる浄土真宗念佛の模範的なお同行（とうぎょう）であった。

なんとかあつたら そりやうそよ  
ただきこえる

「妙好人」とは「妙好華(みょうこうけつ)」(インドではブンダリカ白蓮華、泥のなかから咲きだす白い蓮の花)。教えを説く僧侶や宗教家

たすけられる、たすけられる。  
(以上は『ないおん』一月号、中川真昭  
先生の掲載文の取意)

者・専門修道者ではありません。いわゆる俗世間、普通一般的ななりわいのなかで真宗のおしえを生きている人を、お釈迦様の昔からそういうふうでいるのです。

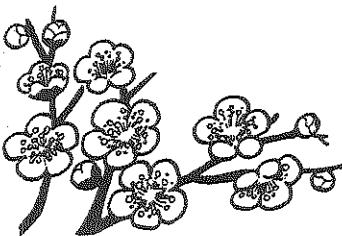
聞いても 聞いても なんともお  
なんともないのが おらじやゆニ  
おらがあるゆえ おやがある  
おとしはせぬぞ、南無阿弥陀仏。

た。農繁期にはしばしばお手伝いのお呼びがかかるのです。しかし今日は、農事のお手伝いではなく、なにやら急いで聞きたいことがあるということ。庄松さんは急いでお屋敷に着いたが、取り次ぎの手違いか太郎次さんは早速には会えなかつた。その間、庄松はいつものように庭さきで草履編みをして待つていた。やがて太郎次さんが息堰切つて帰つてきた。

わたし昭和七年七歳の夏、父を失つた。爾來昭和十年春母の逝去の年まで、その母から厳しく育てられた。早朝たたき起こされ本堂で一人して「お正信偈」の勤行を習つた。終わって本堂板張りの拭き掃除。その間に、高座に上げられ、全く意味もわからんまま「お説経」なるものを何句か高声させられた。その一つ。

「庄松。来てくれたならなんですぐに顔をみせなんだ。今日は草履網に呼んだのではない、ほかならぬお淨土まいりの一大事をお前じきじきに聞きたかったのじゃ。さあさあ、さあさと座敷に上がつとくれ。」と庄松の手を取

(一)の項、次号へ結  
なむあみだぶつ  
おとしはせぬぞ  
おらがあるゆえ 親がある  
なんともないのが おらじやゆえ  
聞いても聞いてもなんともなし



(この項、次号へ続く)

庄松さんはその手を握りかえして言った。  
「お淨土まいりのことは、オラに聞くじゃない。おらのはなしよりも、如来さんの呼び声  
南無阿弥陀仏にじかに聞きなはれ」

庄松さんは、つねに  
「ナムアミダブツよりほか、なんともない」  
が口癖でした。